



日本書紀

卷之二十一



日本歲時紀卷之二

正月之下



正月門松海運繩と云今日思教代敷たれ大なる繩と  
教人い亦つとひくわそひ引ひするわうこれとひ引  
引ひと云ふわうと云ふ事なり

○ 揚すくふ桑河紀よとくま春日はる日ひ拖ひ釣ひ之ひ敷ひ以ひ綴ひ地  
儀ひ繼ひ相ひ貫ひ絳ひ且ひ敷ひ里ひ鳴ひ教ひ牽ひ之ひ按ひ之ひ輪ひ子ひ遊ひ整  
るひ載ひ舟ひ之ひ敷ひ退ひ切ひ物ひ之ひ進ひ則ひ強ひ之ひ名ひ曰ひ物ひ強ひ遊ひ以  
為ひ敷ひ起ひ波ひこれひ繼ひ引ひとお似ひ下ひ事ひなり

○ と云ふひ敷ひ敷ひ少ひくひ白ひ杵ひ判ひ金ひのひくひのひ物ひ他ひのひて







かみすひん乃く先よ孫小憊ととりあふ若  
くれしくせまは毒食たぐむ所汚濁人  
ありく爆杖と致くろれ所依の樹と焚乞  
より遊よ綴くや無紫子乃くつく毛他杜死  
氣未敷杖爆杖警教了又焦氏智新よ孝殿  
後法集と引てつく爆作妖氣と降事位死  
たり都人二伴豊と子ものあり鬼乃くあふ  
崇となされて欠膈と成くろの何さひひふ鬼  
志記りよ死屋と投く物とよ次豊至聖と  
求くこれといのりまれば知く妖崇となひ

いよくけうんあり吸これに宿くつく日辰  
中よおわく際おれごとく爆作すゆり殺十  
靴せよ豊る杖と致くろて爆作して  
峻よつて居これよの妖崇乃事やそく也  
あんこの致候といく刃まの爆作乃邪崇と  
降くろの長押あり去わごる

◎今物山魚粥と考て鑑とまうてこれと合  
流の納る杖まよよ十日いりらつめれせくま  
ふくひらしむげ事なり寢平の比より初り  
とら又七種杖粥といつらハ粒粟赤子蒜子薑子



胡麻子小豆也と延壽丸と刀之入り又九條代右衛門  
おれ紀より白穀まめあつと薬栗柿さけをど  
かりととるせり。正月は地業粥防風粥紫蘇粥  
をどととるせり。二月はあしととるせり。三月は  
今よりえり

○世風紀の正月十五日小豆粥と煮く延壽丸と  
なす延壽丸と薬と煮くはくはくは粥ととるせり  
その粥凝りてあふふじりひあふも跪して乞  
とねととるせり。疫平をとりととるは外縁寄  
祀別殿叔の兵苑をとりととるは外縁寄ととる

娘高代後行して伝すくまたす。玉燭の典  
一二月十五日膏粥とほりて口戸ととる  
ととるせり。又荆楚菜の紀も正月十五日豆  
糜とほりて油膏ととるのうへととるは  
中つととるせり。月令も正月十五日ととる  
正月十五日ととるせり。正月十五日ととる

○今日知延考娘の薬酒ととるは新果  
ととるは正月十五日ととるは正月十五日  
ととるは正月十五日ととるは正月十五日  
○枕のあしととるは正月十五日ととるは正月十五日





やうりうりいも父兄その所引擧て人と  
あやまひへく次

○今秋ハ一年十二夜ハ圓月ハ始まりあり  
ハ何れ人共と習れ月ハ既極ハ二事ハ也  
東波り東玉交人海濱音あり暮秋月と  
そて何れい春月秋月色秋月色  
令人懐慘喜月色令人和悦といひ事  
趙使麟の候録より入て下り載集より上り  
門院無海

花れつるよひる市よりあまの秋のこゝろ

月を月くくくきり 新古今集より大に千里

てりもせはくももたてあまの秋の切や  
月夜ふたふたものるま

○今夕東波り交とと事と忘れ去る命と換  
すし月念廣義より入てり

十六日 國信は日遊樂と事とす

お報せよ音魯ハ人多く四月十六日と  
寺観ふあふこれと走所病といふとけりぬ  
もえこころもい日遊樂と事とありあつるや  
○又今日も念おしる奴婢ハ宿居

俗よのやまらり  
やぶいりといふ

そく主人の一日の始とて家より母と父母兄弟  
親戚と詣す

掲とふよあ系教化の執念をいふ中へ志の  
存のと禁ずり事と司の友あり唯正月十  
五日勅志とあ後各一日禁とゆるらるこれ  
と放夜といふとゆるせしみの國をかくれ  
事ゆるりといふなり

廿日今日女人の徳者の祀とてろと依り  
後徳と養念ふ事ありこれ我生れ徳の徳と  
いふとひひと事ありたるともらゆる

坊といふと初教社と徳なりとゆるこれ  
と徳といふと一徳といふなり

晦日 休

○凡て家の人功とて一と家内は日と家内宅中  
とととくを掃除するなりとありとこれ毎月  
晦日の家内中掃除するなりと掃除しぬれ  
掃除中掃除とほまたわすくして人功とて  
これより掃除するなりと毎月晦日の法司  
の仕事として年中と掃除せむとあり  
延長式小入なり

○荊楚梁陳紀小元日一月晦小正多之並上  
 晴とゆり懸つて飲食次第舟とうり人感ハ水  
 小のうんで宴樂す毎月之れ弦を鳴朝阿ハ  
 西月を初年たりとものて時俗おも人一年  
 以て節とひくより今ハ世民取ふと年始と親  
 戚宴會とるると嘉嘉とつとをかり給ふやこれハ  
 正月世人切やく親戚と宴會す 梅桑庵の教中  
 最可記に  
 啓代終始ハ時俗紀元日ハ後時上振園ハじく飲酒して  
 節と習と習して俗生とひくも人ハ我國ハ能合のみるハ  
 たりや 古く是とも宴會初ハ男女とてハ親戚ハ家ハ  
 宗ハ世承して今世ハ世止ハ月世と宴會應とて

きして物多くと用日とひくも人ハ古く  
 儀と張く時日と阿ハ節ハ又世人月多ハ飲食  
 不 解 飽 志 宴 會 志 新 年 願 事 事 事  
 去ハハ二三月天氣和暖乃時多節 花開阿ハ  
 親と親戚と宴會すハ 是ハ人ハ宴會と悦樂  
 とも時あり 古ハ花開宴會の時と二三月花  
 開阿ハ一ハ啓代終始ハ年身ハ外家花樹  
 ハ歌

今年花似去年好去年人不如今年老始知人  
 老不如花可惜花自無人惜無人惜花不可

高書命朝回花恒會客花撰

玉紅春酒考

去うれども親戚すへなる人頼みみ兄弟を分  
小も親密なるをりくを叔情よ似とく

げ月元日より晦日よをまうく世俗小歳酒を  
製り事有り唐林風著元陰陽の事と風俗  
傳よあをよとよしとひ有小歳酒れ方ハ一年の  
百も酒乃方なり時十干の酒あり但十干此  
間よと酒傳とす甲酉戌庚壬これなりよと酒  
傳とす乙丁己辛癸これなり甲の酒傳とす

言甲乃方に在酉の歳酒を南宮酉乃方よ  
在戌の歳酒を申宮戌乃方よあり庚の歳酒  
を西宮庚乃方よあり壬の歳酒ハ水宮壬乃  
方よあり乙卯干此歳酒ハ時陽酒とひあり  
その方にあり又乙卯歳酒を西宮庚乃方よ在  
丁ノ歳酒ハ水宮壬乃方よあり己未歳酒ハ東  
宮甲乃方よあり辛ノ歳酒ハ南宮酉乃方よ  
あり癸此歳酒ハ申宮戌乃方よあり乙丁己辛  
癸を陰干とす有よたのづゝ酒の陽干  
よ配合して酒となすとて乙卯己酉甲の歳



日月乃多ととらるるあり揚とるる月紀大なる也  
 以之案案祀日月星辰之義云然日於壇祭月於  
 壇揚氏云春分朝日始於夕月始於日之西  
 禮也賈誼保傅傳云二代之祀天子喜朝於日  
 暮夕月鄭氏云祭日東壇祭月西壇顏氏云朝  
 日以朝夕月以暮皆迎其初出也 日月在中央於杜氏  
 通典文獻通考より  
 これを承りて日月の多し祭事ととらるる也  
 朝之人室又十二代漢後天皇乃御於天照太孫の  
 以朝小とりと中野氏の祀者乃大明神より之を  
 代乃澄智原也といふ其神は朝命ありと玉璽乃

ひし事多しととらるる也 たけ  
 とたさしむむ この 日待月待乃事 こと  
 了今乃世俗士庶人より之を以て俗と待て終  
 とよき世後とす し 祭食とらるるて日月  
 の祭となす し 日待月待と云は天孫にあたり  
 て日月とあるる し 小幡乃飛れ し  
 志記より何事 し 此は し 尊の大  
 史季氏より し 祭樂 し 八倍 し  
 舞 し 孔子 し 王 し  
 之 し





ねのりのねよおのるゝ雲あうはくくろのすく  
 具とろろのねほとほくく次天子にあり  
 去る日月と雲の車いぢうくくは道徳何  
 元地終代とたの人の福をくくして思ひて  
 福ありとんや天徳日月と徳候乃家よある  
 とや親日月と久くくえある人とたるふあは福  
 おのるまありそとみ縁とと保るものも  
 天徳神明の知りやあもまてかめくと人とい  
 一はあみの何くくあうんまもかめくと借  
 乃福のまありをたあじう福よとていひま

乃道徳なるくくやとろくははくくむく事あり  
 又佛地命世紀の縁ととろけく福よつろく道  
 と徳よとろくくあうんまもかめくと人とい  
 て福ととあはくくまれととろくははくく  
 仙道とと縁の理ああよひくくははくく  
 縁言の因の二をくく小僧尼のよとて縁  
 とゆりましすまのまのくくははくくははくく  
 乃縁の佛と中まといひ縁と縁といひ縁と  
 あくくまといひ縁と縁とまといひ縁と縁と  
 とひ尼と女髪もと云齋と片膳といひこれと向



宗室ハ三ノ戸を乃び三ノ戸に廣申と書れがこ  
戸依守又大年廣記よとく勢之三屍代姓  
宗人男の中ふわくを承てうりひ系  
一廣申の目又起りての上系一御承  
他とまのぶものまづ三屍と縁づ一かくた  
存まばとれたら御儀ゆ一志と感御編  
いしく三戸の御とましく人乃代りの中ふり  
人乃善悪とよく考御く廣申の目と上  
三屍代男のおまの西代天曹の氣にうりて此  
人わうく乃ぶとたの御事と知行ひるを具

小ばぐるれ人乃あやまらたをれハ怒り一紀  
十二年乃壽命とうりひ少をま一算六十年  
乃命とうらふあよむと御くその御一  
てこれをとけよとありか御承御好御承  
んが御ずらまたんや御善れおまの御承  
何り積不善乃家小の御承あるを御人乃御  
承御承の御承と志るあよむと御承と承りて  
廣申の取御承と承りぬを御承と承りて  
まぬら御承と承り人乃御承と承りて御承  
おれ御承と承りて御承と承りて御承と承り

小下あき程りと志くぶらうやど人や庚  
申と志くハ程乃義よあらずけ本極  
らびて勢解よとらとよ今世の俗これと  
志くど機念とまうて庚申と志くと機  
あやまのり上は阿房のあづべー又器邦  
あき庚申ハ機回度大邪乃引る給ふ日あき  
や大邪とまうつらういふを信まてこれ又  
附會の信あり又庚申金あり申も金あり  
金と金と朝する日あきつていふ日あり  
いふよ中ふ土と入て機成は勢ととらとや

先又機成あり己のの刻とつて庚と申  
そのまやうに程のハ機ハ理の事あり  
是く信らた流俗よ志くらハ物終妖事乃  
るりと志くさび志く可なりされハ柳子厚三  
と罵文あり吾淵頼之勢信あり程氣論柳  
り文に誠とらあり又機成又庚申乃志く  
成生ハ邪法あり程氏をいふと志くせり  
深居とらうて機成ハ事と知くかくとら  
解波探信よ子信と志く機成ハ信ありて信  
おも又信ありと志くいふ機成ハ信あり

許都別り後、初共守唐申と云るに  
と、張籍り周岳代侍り唯教推甲子不後  
唐申と云るなり

世後西元九月とて比二月と拘忌事らあてり  
中毒もあつたてくあつたり又籍記に  
西元九元上友唐より築じ是あり法波籍記  
小くく佛法は此二月為齋素月不宣事教  
是破信之今京師官命下外任初不忌此月  
而差跌又少外友也不西之若る初敗又友何  
不思之甚也とり又郡郡代解解と云く西元

九月元上友戴城りてく籍氏乃多衛り元帝  
籍氏と云く西元別とてく西元一月  
籍氏一人の善悪と考す此二月南瞻部別と  
て、此唐人これと云く死別と云り予曰二長  
月此法因く唐事といふも石上友流世因  
之と云く人こそと云くまは唐氏乃悦りて  
傷家は後つたれし乞好と海するも及つて世人  
多しすげ拘忌もあつたりて可なり  
をろくしあつて西元は籍氏乃徳と云く思を厭  
七月今唐義に及んたり我國を籍氏の





何んぞひ弱く遊ばすまじび理明らるるがよの  
けりうろたふとまじとまじ

げ月樹木と樹根と一西月と木と一ゆる上付す

中古書より足さるり枝と切く地は挿しは月

より又花葉と樹根とをげ月よりさりとは合

産義よりとるりこれより樹根の氣とゆる樹

生流るるありや花政全書よりとる元後葉木

と樹へふ下弦の後上弦の葉より  
下弦はハサニ三日  
と上弦とい

八日と地帯の八月は流るる葉あり樹とまじ

氣盛なり樹木の生葉全く枝葉よりありあり

移せばを樹とやう移木とハバこ木とやう

又つらく元果木とゆるゆる先九月の仲秋後

樹はまじりと樹と繩とまじりまじりとかりきり

よりありあり肥土と入水と渡り一次年正月

うつらゆる一移樹の時土と中分を移すは

おとつたかてくまじりよやうなる土と加え

地而より二三寸たたく志くすり土とたまりた

く連るる次葉ののら中月やい毎の水と流

は月柳の枝と切て地は挿し速く生長ととも月全産

義より足さるり元月枝と挿し可あり木の枝





歐陽子之種記傳

淺深紅白宜和間先後仍須次第栽我欲何成  
播酒去等數一日不須用

楊滋齋云云種之傳

三區初用是蔣卿再開三區有剛明謙商奄首  
云云連一區花開一區

趙白雲之種仁杏傳

白雲種根從遠運何年及見子垂一老矣但欲  
識培植不同園花結子時

四月之數生此種者有本とらるるなるを

菓とくひがひなりなり是よりきむくもくこ

むまれのり物ひまより然るをとさるひりか  
は事月念よりえり部子のつく樹木の時

禽獸以時殺鳥乳より日射一樹殺一菓不  
時也これ多義よあり本とこり殺とこ

とふ時とひきせり本と他をまはせり  
天也へり不者ありととらるるなり

麩の種よとく益麩の月天也冷始方物  
ある固密して志氣と池よりなり

げ月狸肉とくくハ種とや梅の菓とくくハ腎と

生葱とくくいの面よ遊風と起すの又梨こくく  
こなるれ又響花不州代抽とさうして飛燕  
乃氣と遊へく  
月令廣義  
叢書

凡一年の七中二候あり又日と一候と一候と一  
氣と一候と一月と一候と一候と一候と一候と一  
四月より十二月まで毎月各七候とさうと起  
四月乃六候牙一東風細凍牙之蟄蟲始振牙  
之魚上氷右立候乃三候あり牙曰鰌魚之魚牙  
又海鰻魚牙之魚本筋動右氷乃三候あり  
凡一日一候漏刻の數とて百刻百刻ハ漏刻の

内よ立くく乃義又二ささくく教あり海陽代  
長に去るうのて登候乃長短ひくくうく  
登ふぐも付を教ふくく取なふ代付ハ登  
くく一在二中四氣登候たぐひハ登候  
先立候ハ登四十二刻ハ十分取ハ十分  
十分合百刻あり氷ハ登四十二刻ハ十分  
取ハ十分刻十分あり凡六十分と一刻ハ

月令廣義  
よ丸く

日本書紀卷之二終

日本書紀卷之二終

二六

